

第 2 章



遠隔を活用した実践

遠隔でのやりとりは、移動時間と空間の制限を超えて、関係者がつながりやすいなどのメリットがあると考えます。

この章では、ICTを「多面的・多角的な視点からの実態把握」や、「児童生徒の的確な自己評価」、「担当教師の指導方法の改善に生かすための評価」、「担当教師と他校通級の在籍校・在籍学級担任等との連携」「通級による指導の効果が、通常の学級においても波及することを旨とするための連携」などに活用して、効果的であった実践を紹介します。



特別支援学級担任が、次時の学習について、相手校の職員と、市教育委員会担当指導主事と3者で打合せをしている。



在籍学級担任が、通級による指導の担当教師と、情報交換をしている。

(1) 遠隔でのやりとりを含めた、児童生徒の実態把握

おさえておきたいこと



実態把握は、個別の指導計画を作成し、自立活動の指導を行う際に特に重要です。教育的立場からの実態把握ばかりでなく、心理的な立場、医学的な立場、福祉的な立場等、様々な立場の方からの情報を収集して実態把握を行うことが大切です。(参照:解説自立活動編 P106～)

同じ障害種であっても、個々の障害の状況等により、学びの過程において考えられる困難さは異なることから、「実態把握」が、指導の質を決めると言っても過言ではありません。

遠隔でのやりとりは、移動時間と空間の制限を超えて、関係者がつながりやすいというメリットがあると考えました。

そこで、遠隔でのやりとりを、「**多面的・多角的な視点からの実態把握**」のために活用することとしました。共有資料として、学習指導要領の「流れ図」を参考にして県総合教育センターが作成した、電子版の「**自立活動目標設定シート**」を活用しました。

ICTを活用することにより、外部の専門家を含む学校内外の関係者とつながることができ、多面的・多角的な視点から実態把握を行うことに有効であることが分かりました。

外部の専門家(千葉県発達障害者支援センター)と連携した事例

通級による指導(LD・ADHD等)の担当教師が、外部の専門家と、Web会議システムを活用して、児童の多角的な視点からの実態把握について助言を得て、タイムリーに指導・支援に生かすことができました。

(1) 取組内容

- 千葉県発達障害者支援センターと連携し、「授業前の検討」・「当日の研究授業」・「授業後の振り返り」を、1つのサイクルとして、児童の実態把握の仕方を中心に指導・助言を受けた。
- 録画で授業参観をしていただき、それをもとにオンラインを活用して話し合いをし、指導・助言を得ることができた。
- 共有資料として、「自立活動目標設定シート」を活用した。

(2) 成果

- 回数を多く確保できたので、きめ細かい実態把握につながった。
- オンラインの活用ですぐに相談でき、録画した授業の観察をとおしてA児の実態把握や対応の仕方、自立活動のねらいなどについて指導をいただき、授業に生かすことができた。即効性があった。



日時	形態	内容
8月19日	対面(来校)	児童の障害の状態等の説明
8月30日	対面(来校)	自立活動目標設定シートを作成
9月14日	オンライン	授業の様子(録画)から、A児の実態把握の在り方
10月31日	オンライン	10/7 実施の授業(録画)から、A児の実態把握の在り方
11月16日	オンライン	10/28 実施の授業(録画)から、A児の実態把握の在り方

学校内外の関係者間で情報共有した事例

通級による指導(難聴)の担当教師が、在籍学級担任、特別支援教育コーディネーター、通級による指導(言語障害)の担当教師などと、グループウェアや、Web会議システムを活用して情報を共有し、多面的・多角的な視点から実態把握を行い、指導・支援の充実に結び付けた。

(1) 取組内容

○ICTを活用して、実際の指導場面を外部の専門家に視聴していただき、専門的なアセスメントや助言を受けた。

○児童が定期的に通院している医療機関(小児難聴)の医師や言語聴覚士、補聴器販売店、県立の聾学校の教師、在籍校の教師など、それぞれの立場の方から指導・助言を得ることができ、多面的・多角的な視点からの実態把握を行った。

○情報を共有する上では、Web会議システムやグループウェアを活用し、通級による指導の場面や在籍校での様子を録画しオンラインを活用して視聴し合い、指導・助言を得たり、相談したりした。

(2) 成果と課題

① 成果

○在籍校との連携は、グループウェアの活用により、通級による指導や在籍校での様子を、写真等を使って共有したり、合理的配慮についてより具体的な提示をしたりし、情報共有することができ、多面的・多角的な実態把握につながった。

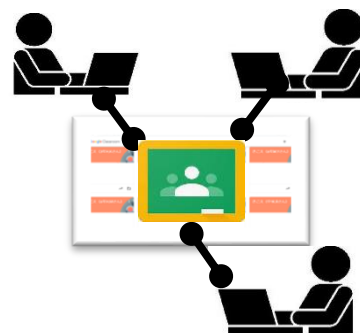
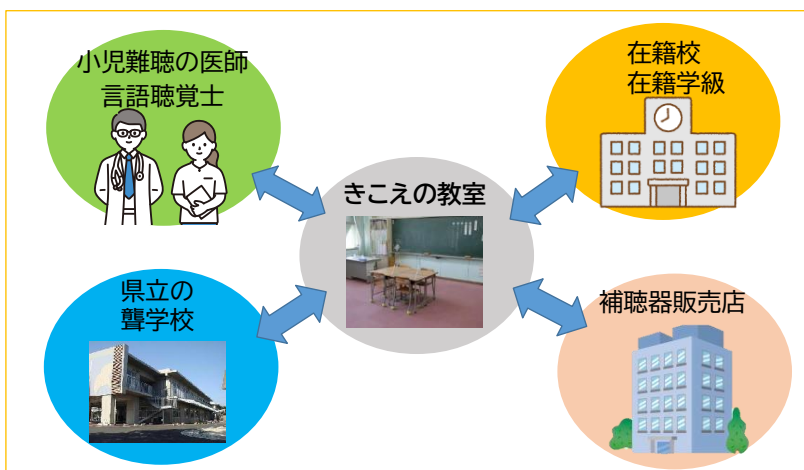
○小児難聴の担当医師から、聴力変動時の対応や補聴援助システムの必要性について、個別に助言を受けることができた。

○医療機関や補聴器販売店とのやりとりでは、聴力変動時の対応や補聴援助システムの必要性、補聴器のプログラム設定などについて助言を得ることができ、実態把握に生かすことができた。

② 課題

○指導場面の録画は、児童の表情がよく見える構図や高画質が求められる。連携先のインターネット環境にも留意する必要がある。

○実際の音声と録画による音声では音質が異なるため、発音の実態把握を行う際は、対面での聞き取りも合わせて行う必要がある。



◆下図は、県総合教育センターが、学習指導要領の「流れ図」を参考に作成した電子版のシートで、「個別の指導計画」等、複数のシート間がリンクされています。詳細は、県総合教育センターのHPをご覧ください。



自立活動目標設定シート (自立活動フローシート改訂版)

学部・学年	年 組	氏名	A
--------------	------------	-----------	---

障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよき、課題等について情報をまとめて、学習や生活の状況・様子を記載する

自立活動の区分に即して整理する

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション

○年後の姿の観点から整理する (生活年齢や卒業までの年数を考慮し、どのような力を育むとよいかを記載する)

実態把握をもとに、課題を抽出し、中心的な課題を導き出す

課題に基づき設定した指導目標(ねらい)を記す

指導目標 (年間)

指導目標を達成するために必要な項目を選定する

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
①生活のリズムや生活習慣の形成	①情緒の安定	①他者とのかわりの基礎	①保有する感覚の活用	①姿勢と運動・動作の基本的技能	①コミュニケーションの基礎的能力
②病気の状態の理解と生活管理	②状況の理解と変化への対応	②他者の意図や感情の理解	②感覚や認知の特性についての理解と対応	②姿勢保持と運動・動作の補助手段の活用	②言語の受容と表出
③身体各部の状態の理解と養護	③障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲	③自己の理解と行動の調整	③感覚の補助及び代行手段の活用	③日常生活に必要な基本動作	③言語の形成と活用
④障害の特性の理解と生活環境の調整		④集団への参加の基礎	④感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動	④身体の移動能力	④コミュニケーション手段の選択と活用
⑤健康状態の維持・改善			⑤認知や行動の手掛かりとなる概念の形成	⑤作業に必要な動作と円滑な遂行	⑤状況に応じたコミュニケーション

☑して利用

選定された項目を関連付け具体的な指導内容を設定する

指導場面 (教科等・単元名等)	教科等	単元名等	教科等	単元名等

自立活動目標	前 期	後 期

(2) 遠隔による評価



おさえておきたいこと

指導の改善に結び付ける。	教師には、評価を通じて適切な指導内容・方法の改善に結びつけることが求められている。
目標達成に近付いているか、学習状況の評価を行う。	教師間の協力の下で適切な方法を活用して進めるとともに、必要に応じて外部の専門家や保護者等との連携を図っていくことも必要である。
本人の自己評価を取り入れる。	本人にとっても、学習状況や結果に気付き、自分を見つめ直すきっかけとなる。

(参照:解説自立活動編 P118～)

遠隔による評価は、保存性・客観性が高いというメリットがあると考えました。そこで、担当教師や在籍学級担任の指導の振り返りに生かすための評価や、児童の的確な自己評価に活用することとしました。

ICTを活用することにより、多面的・多角的な視点からの評価を行うことができ、担当教師や在籍学級担任の指導方法の改善や、児童生徒の自己理解を深めることにつながる自己評価等に有効であることが分かりました。

「指導方法の改善」のために活用した事例

視覚障害のある児童の在籍学級担任が、通級による指導の担当教師と、オンラインを活用して、理科や家庭科、体育科等の実技や演習の様子を撮影した録画を共有し、児童の学習評価や指導・支援の振り返りを行い、指導方法の改善に生かすことができた。録画による情報共有は、教科指導だけでなく、修学旅行や運動会等の行事についても事前・事後に行った。

(1) 取組内容

- 在籍学級担任が、通常の学級での学習の様子を動画撮影し、通級による指導の担当教師と、オンラインを活用して合同視聴し評価について話し合った。本人の学習上の困難さを把握するようにした。
- 理科「水溶液の性質とはたらき」での実験の様子をタブレット型端末で撮影した録画を、担当教師が、授業の翌週の通級による指導の際に、児童とともに、「理科学習の振り返り」に活用した。

(2) 成果と課題

- ① 成果
 - 通級による指導の担当教師は、これまで対面による指導の際に本人の記憶による自己評価と、在籍学級担任からの連絡帳をもとに実態把握や評価を行っていた。オンラインを活用して録画を基に、在籍学級担任と通級による指導の担当教師の、両者の立場から評価について見直すことができ、具体的な改善策を検討することができた。
 - 通常の学級での指導と、通級による指導の、どちらの学びの場においても、指導方法の改善に生かすことができた。
- ② 課題
 - 通常の学級での指導と、通級による指導の、お互いの指導の様子を相互参観する機会を計画的に進めていく必要がある。その上で、通級による指導の効果が、在籍学級での学習や日常生活でも生かされているかどうか評価していくことが大切である。

児童生徒の「的確な自己評価」のために活用した事例

事例1 Web会議システムを活用して、リアルタイムで自分の動きをモニターしながら活動した事例

(1) 取組内容

○Web会議システムを活用して、リアルタイムに自分の身体の動きや口・舌の動きをモニターすることができるように環境をデザインすることにより、学習時間の後半に行う振り返りだけでなく、学習中にも自己評価の機会を適切に設定した。



児童の**後方と前方にカメラを設置し**、自身の動きをモニターしながら、できていることを確認している。



(2) 成果

○児童の後方と前方にカメラを設置し、オンラインでつながっているゲストティーチャーに、児童の正面及び後ろ姿から身体の状態や動きが分かるようにしたことにより、きめ細かい支援や助言を得ることができた。担任は、適切な評価に結び付けることができた。

○児童は、自分で見えない背中などの動きなどを、その都度確認しながら集中して学習に取り組むことができた。自分ができるようになった動きや運動がすぐに分かり喜んでいった。

○学習の振り返りの自己評価だけでなく、学習中にも自己評価の機会を設定することができた。

事例2 Web会議システムを活用して、慣れた人だけでなく様々な立場の人と関わり、生徒にとって自己評価のための情報が多く得られるようにした事例

(1) 取組内容

○他者との関わりをもつことが、自分のよさを見出すきっかけとなるよう、オンラインを活用して様々な人とのコミュニケーションの様子を自己評価する。

○自立活動の目標を明確にし、適切なタイミングで自己評価ができるように、対面と遠隔による指導を組み合わせた指導計画を作成する。

(2) 成果と課題

① 成果

○自分自身に興味のなかった生徒が、授業を進める中で得意なことを見出し、「相手とのやりとりも良くなった。」と自己評価できるようになった。

○慣れた他者との会話だけで生活していた生徒が、オンラインを活用してSCや高等学校の教師等と関わることにより、相手の置かれている状況を考え、できたことや得意なことを相手から伝えられたことで、自信が生まれ、声の大きさや表情にも変化が見られた。

○遠隔による評価は、自己評価と様々な他者からの評価で、生徒の変容が促され、自信へとつながる可能性があることがわかった。

② 課題

○遠隔による評価は、対面での評価との組み合わせが必要であり、生徒が自分について考える時間や他者との適切なやりとりの設定が重要である。

○自閉症の特徴がみられる生徒の場合は、誰と、どのような内容で進めるのかを、実態に合わせて慎重に進めて行く必要がある。

○録画を活用した自己評価も、生徒が自分の学習の様子を客観的に見ることにより、気付きが生まれ、深めることにつながることが分かった。

(3) 遠隔でのやりとりを含めた、外部の専門家や在籍学級担任 (他校を含む)等との連携

おさえておきたいこと



なぜ、「学びのネットワーク」を構築し、連携を重視するのでしょうか。

それは、主に次の3点によるものです。

- ① 自立活動の指導の成果が、学習や生活の支えとなるため、通常の学級においても、波及することを目指していくことが重要である。
- ② 自立活動の指導は、幼児児童生徒の障害の状態によって、専門的な知識や技能を必要としている。
- ③ 自立活動の指導の成果が、就学先や進学先でも生かされるように、個別の教育支援計画等を活用して連携を図ることが求められている。

(参照:解説自立活動編 P123~)

ICTを活用した「遠隔による連携」は、移動時間や空間の制限を超えて、多くの関係者となつながら可能性が広がるというメリットがあると考えました。

そこで、遠隔でのやりとりを通して、「学びのネットワーク」の構築と活用を目指すこととしました。

ICTを活用することにより、学校内外の関係者がネットワークを組み、児童生徒の指導・支援の充実や、教師の指導力の向上に有効であることが分かりました。また、遠隔でのやりとりは、これまで行われてきた間接的な連携(連絡帳等)だけでなく、直接的な連携(直接話し合うことができる)を図ることができ、そのための仕組みづくりにも有効であることが分かりました。

「継続した学びの保障」のために活用した事例

事例1 オンラインのWeb配信を活用して、特別支援学級(教室)から、学校行事へ参加

○特別支援学級担任と、交流学級担任が連携し、特別支援学級在籍生徒が、オンラインのWeb配信を活用して、教室から、校内の行事(スポーツレク大会、部活動壮行会、生徒会役員選挙立会演説会等)を視聴する形で参加できるようにした。その結果、次のような成果が得られた。

- ・学校行事へ直接参加することが難しい生徒が、行事の様子を視聴し、自分も集団の一員であることを実感することができた。
- ・視聴することで参加しているという肯定的な気持ちをもてるように支援することができた。

事例2 Web会議システムを活用して、校内の別室から、在籍学級の授業へ参加

○通級による指導の担当教師と、在籍学級担任が連携し、通級による指導を受けている児童が、Web会議システムを活用して、校内の別室から、在籍学級の授業に参加できるようにした。その結果、次のような成果が得られた。

- ・部屋の広さや音の刺激等、環境を調整し、児童にとって学びやすい環境をデザインにすることにより、落ち着いて参加できることが分かった。
- ・児童は学校を休まず意欲的に参加していた。回を重ねる度に、グループの中で双方向のやりとりをする時間が増えた。
- ・児童本人と対話をしながら目標を具体的にスモールステップで設定しながら実施できた。

「担当教師と他校通級の在籍校・在籍学級担任等との連携」のために活用した事例

事例1 Web会議システムを活用して、定期ミーティングを実施した事例

○通級による指導(言語障害)の担当教師が、他校通級児童に対して、オンラインを活用した自立活動の指導終了後の放課後に、そのままオンラインを活用して在籍学級担任と「定期ミーティング」を行い、情報共有を図った。その結果、次のような成果が得られた。

- ・タイムリーに情報共有をすることができ、通級による指導と通常の学級、どちらの学びの場においても、個に応じた適切な支援を行うことができた。
- ・通常の学級での様子を聞いて、通級による指導の効果が生かされていることが確認できた。
- ・在籍学級担任に、児童の実態や言語の指導方法を理解してもらうと同時に、それぞれの場面で一貫したねらいや観点をもって指導・支援を行うことができた。

○通級による指導(他校通級)を行う際は、在籍校との連携が不可欠であることから、どの場面でのどのような連携が効果的か、計画を立てて取り組み、その都度連絡調整をしながら進めていくことが大切である。

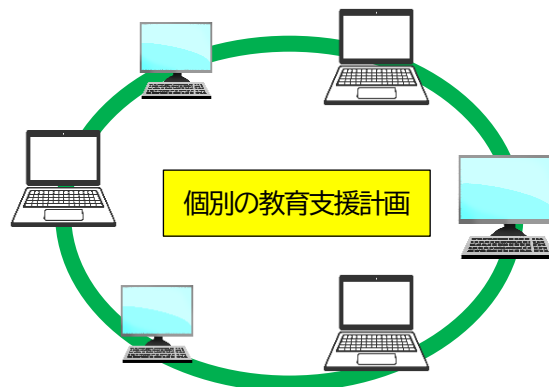
○これまで連絡帳などを通して間接的な情報交換を行ってきたが、オンラインを活用することにより、タイムリーに直接的な情報交換が可能になった。持続可能なシステム化を目指していきたい。



事例2 グループウェアを活用して、個別の教育支援計画等に係る情報を共有した事例

○通級による指導(難聴)の担当教師が、複数の在籍学級担任と、グループウェアを活用して、情報共有等を行った。その結果、次のような成果が得られた。

- ・市内共通の共有フォルダに、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成する際の資料を入れたことにより、在籍校は効率的に作成に取り掛かることができた。また、情報交換をしながら、一緒に作成することができた。
- ・学年始めの早い段階(4月)で、担当教師から、各在籍学校・在籍学級担任に、児童個々の聞こえにくさや合理的配慮などについて伝えることができ、在籍校における早期支援や配慮へつなげることができた。



通級による指導の効果が、通常の学級においても波及することを 目指していくために活用した事例 (全校体制で、「波及」を目指す)

在籍校の特別支援教育コーディネーターや在籍学級担任等が、通級による指導(難聴)の担当教師とグループウェアを活用して情報交換をし、そこで得られた情報をもとに、生徒本人と必要な支援について話し合い、その話し合った内容を関係する他の職員に伝え、様々な教科指導や諸活動にも広げるといったシステムをつくった。このシステムは、中学校における連携・波及のモデルとなる事例となった。

(1) 取組内容

◆通級による指導の効果が、通常の学級においても波及することを目指していくため、次のような手順で取り組んだ。

- ①在籍校と通級による指導(難聴)の担当教師が、グループウェアを活用して情報交換をする仕組みをベースとした。(連携)
- ②校長の指導の下、特別支援教育コーディネーターが中心となって、在籍学級担任・教科担任等とつなぎ、必要な配慮・支援の内容に応じて、校内組織に働きかけた。
- ③実践の入口を英語科の授業とした。補聴援助システム(ロジャーマイク)の活用に始まり、生徒本人と一緒に必要な支援(聞き取りやすい環境等)について考え、授業の中で一つ一つ形にした。(協働)
- ④他の教科にも広げた。体育科(体育館等)、理科(理科室等)、音楽科(音楽室等)、家庭科(家庭科室等)など、教科により様々な音環境の違いがあり、新たな気付きが増えた。(波及)
- ⑤次の段階として、部活動や委員会活動、学校行事でのやりとりにつなげた。生徒が主体的に活動できる場が広がっていった。



(2) 成果と課題

① 成果

- グループウェアの活用で、在籍校と通級による指導(難聴)の担当教師が、日常的につながるできるようになり、連携が密になった。連携が密になることにより、在籍校の教職員の、生徒への指導・支援への意識が向上し、「波及」が進んだ。
- グループウェアの活用により、職員の、聴覚障害に関する知識や支援方法等の研修機会が格段に増え、指導力の向上につながった。
- 書き込んだメール等のやりとりがスクロール画面で見られるので、複数の職員がそれぞれのタイミングで必要な情報にアクセスでき、目的意識をもって情報共有することができた。
- 中学校は小学校に比べて、複数の指導者による関わり・教室の移動・時間割の変更等が日常的に多くある。支援に必要な情報が校内で適切に共有されることにより、生徒本人のニーズと活動の場に応じた支援が進んだ。
- 指導上の様々な変化に学校全体で対応しやすくなった。

② 課題

- グループウェアを活用する上で、安易に参加人数を増やすだけでは、形だけの連携になりやすい。活動の目的に応じて、グループのメンバーをどのように組み立て、誰が調整していくかなど、校務分掌に照らしてそれぞれの役割を明確にすることが必要である。

「地域の研修体制の充実」のために活用した事例

事例1 オンライン公開研究授業により、効率的に研修を実施した事例

(1) 取組内容

○市内の通級による指導(言語障害)の設置校に対し、オンライン公開研究授業を配信することを通して、担当教師の研修の場とし、指導力の向上を目指した。

(2) 成果と課題

① 成果

○感染症の拡大により研修会の機会が減る中で、講師の指導を市内の担当教師が各学校から視聴することにより、指導の専門性を高めることができた。移動時間の短縮が図られたことにより、担当教師の多くが参加できた。

○Web会議システムの投稿機能を活用することにより、配信した授業について外部からの評価を得ることができた。

② 課題

○授業後の研究協議や講師指導については、配信のみであるため、今後は双方向での意見交換が行えるようにする。

○市学校支援コーディネーターによるオンラインを活用した日常的な指導や、市内担当教師間での日常的な授業公開のシステム化を目指す。

「他職種と連携し、指導力の向上」のために活用した事例

事例1 オンライン公開研究授業を実施し、外部の専門家(大学教授)から指導を得た事例

○外部の専門家(大学教授)に、研究授業を参観していただいたり、授業の録画を視聴していただいたりした。その結果、次のような成果が得られた。

・自立活動目標設定に至るプロセスや、構音障害のある児童への指導のポイント等について、専門的な指導・助言を得ることができた。適切な指導・支援に生かすことができた。

・「自立活動目標設定シート」の記載内容について、専門的な立場から助言を得て、見直しをすることができた。

・外部の専門家の助言や知見などを指導に生かすことが教師の専門性であり、大切なことであることが再認識され、有意義であった。



事例2 録画のやりとりを通して、医療機関から助言を得た事例

○児童の成長や日常生活の動きの変化などに伴って、身体の状態は変化する。変化に対応した指導が必要になることから、医療機関との連携は必須であると考えた。そこで、医療機関で行ったリハビリの録画を授業に生かしたり、授業の録画を医療機関のリハビリ担当者に視聴していただいたりした。その結果、次のような成果が得られた。

・カンファレンスにより、医療と学校の役割分担について確認をする等、連携を深めることができた。

・授業の録画を持って医療機関に行き、担当者から助言を受けて、日々の指導に生かすことができた。